

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	篠崎 亜由美
学位授与の条件	学位規則第 4 条第①、2 項該当		
論文題目			
<p>Effects of a psychoeducation program for people with schizophrenia aimed at increasing subjective well-being and the factors influencing those effects: a preliminary study （主観的 well-being の向上を目的とした統合失調症患者の心理教育プログラムの効果とその影響要因に関する予備的研究）</p>			
論文審査担当者			
主査	教授	花岡 秀明	印
審査委員	教授	祖父江 育子	
審査委員	教授	中谷 久恵	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>統合失調症患者に対する心理教育は、病気や薬物療法、ストレス対処などの知識や情報を提供することで、病気に対する理解を深め、患者が治療に主体的に取り組んでいくためのプログラムである。心理教育プログラムの多くは、病気や症状、薬物療法、対処法などの内容から構成され、患者のアドヒアランス向上を目的とし、再発予防のために重要なプログラムとして位置づけられている。一方、統合失調症の治療・リハビリテーションのアウトカムとして、症状や客観的な適応状態に加え、リカバリーや主観的 well-being という主観的アウトカムが重要とされるようになってきた。しかし統合失調症患者に対する心理教育プログラムにおいて、主観的 well-being の改善に焦点をあてた介入や、その効果に影響を与える要因について明らかにしたものはみられない。そこで本研究は、従来型の知識や情報の提供を中心とした心理教育に、統合失調症患者の主観的 well-being 向上を目的とした新たな介入を加え、プログラムの効果やそれに影響する要因について予備的に検討することを目的とした。</p> <p>対象は、2012 年から 2018 年に実施した心理教育統合失調症プログラムへ参加した者とした。対象者の適格基準は、(1) DSM-IV または ICD-10 に基づく診断が統合失調症、(2) 参加可能と主治医が判断、(3) セッションや質問紙の内容が理解可能な者とし、本人への説明と同意のもと参加者を決定した。心理教育プログラムにおける 1 クールの参加者は 6 名前後で、週 1 回実施した。セッションは全 4 回で、第 1 回：統合失調症について、第 2 回：薬について、第 3 回：ストレス対処について、第 4 回：社会資源について、とした。主観的 well-being に焦点をあてた介入として、毎回のセッション終了時、セッションで扱った内容について日常生活場面でも振り返りを行うようなホームワークを参加者に与えた。また、参加者の夢や希望を事前にアンケート調査で確認し、主観的 well-being に焦点を当てた情報提供や対処法の獲得を促した。評価に</p>			

あたっては、プログラム前後で主観的 well-being (Subjective Well-being under Neuroleptic drug treatment Short form, Japanese version: SWNS-J), 薬に対する構え (Drug Attitude Inventory-10: DAI-10), 抗精神病薬の服用量の比較を行った。また、精神症状 (Positive and Negative Syndrome Scale: PANSS)などの基礎情報も調査し、プログラムの効果に影響する要因について分析を行った。

解析対象者は男性 71 名, 女性 46 名の計 117 名であった。心理教育の前後で, SWNS-J の全ての下位項目と総得点で有意な得点の上昇を認めた。また, 心理教育後の SWNS-J の総得点と心理教育前の SWNS-J の総得点, PANSS 陰性尺度得点, 心理教育後の DAI-10 得点との間にそれぞれ有意な相関が認められた。心理教育後の SWNS-J の総得点を従属変数, 心理教育前の SWNS-J の総得点, PANSS 陰性尺度得点, 心理教育後の DAI-10 得点を独立変数とする重回帰分析を行った結果, 心理教育後の SWNS-J の総得点に関連する要因として, これら 3 因子がすべて抽出された。すなわち, 心理教育後の主観的 well-being には, 心理教育前の主観的 well-being, 陰性症状の重症度, および心理教育後の薬に対する構えが関与していた。

本研究では, 従来の精神科心理教育に主観的 well-being に焦点を当てたプログラムを取り入れ, その効果を検証するための予備的検討を行った。その結果, 心理教育の前後で SWNS-J におけるすべての各項目得点が有意に上昇することが示された。この結果は, 統合失調症患者に対する心理教育において, 主観的 well-being の改善に焦点をあてた今回の介入プログラムが有効である可能性を示唆している。また, 心理教育後の主観的 well-being に関連する要因として, 心理教育前の主観的 well-being, 陰性症状の重症度と, 心理教育後の薬に対する構えが抽出されたことから, 介入前の主観的 well-being が高い者また陰性症状が軽い者ほど, さらに薬物療法への理解度が高まる者ほど, 本プログラムにより主観的 well-being が改善する可能性があることが示唆された。

以上の結果から, 本論文は, 今回取り組んだ新たな心理教育が統合失調症患者の主観的 well-being 向上に有効である可能性を示し, さらにどのような患者に適用するのが効果的であるかの示唆を与えたことから, 統合失調症患者に対する精神科リハビリテーション領域に大きく貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は, 本論文が著者に博士 (保健学) の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。